



昭和49年(1974年)
11月号(No.353)
社団法人 日本山岳会
(J.A.C.)

定価一部 100円

目次

- 本文・紀行・随想
霞沢岳の東面
小島鳥水追跡紀行…近藤信行…(1)
深田久弥文学碑建立の経緯
……山下久男…(4)
大平展翁と楽園…久保田全…(4)
シベリヤで見た三角点
……古沢 肇…(5)
素晴らしい年長者との
出会い……周布光兼…(5)
芽登温泉……川崎精雄…(6)
大無間山、小無間山…松家 晋…(6)
行事・委員会
英国女流登山家の先駆者
J・ダンシース女史を
囲んで……婦人懇談会…(7)
穂高岳洞沢合宿報告書
……青年懇談会…(7)
海外からのたより
カトマンズより……高橋 照…(7)
同 二信……高橋 照…(8)
図書紹介
横智雄先生追想集……山崎安治…(8)
Samuel Brawand: Grindel-
wald Bergführer
……麻生武治…(8)
図書室便り……(9)
その他
和書目録完成のお知らせ
……図書委員会…(9)
南米大陸女子縦断隊の
出発……小倉董子…(9)

霞沢岳の東面

——小島鳥水追跡紀行——

近藤 信 行

川原の流水をひろいあつめて火をつけると、それはおもしろいほどよく燃えはじめた。岳樺の太木は赤い炎を吹きあげ、暗黒の谷間のなかで天空を焦がさんばかりであった。こんな豪勢な焚火はひさしぶりのことだ。われわれは足をなげだして、この谷の詮索に夢中になっていた。

「鳥水さんは、あるいはここの谷を登ったのかもしれない。すると頂上へまっすぐ取りついたらどうか考えられないな……」

「ぼくはやはり右俣をつめたんだとおもいますがね。鳥水の場合、絶頂と絶嶺という言葉の使い方があいまいなんです。あきらかに使いわけているところもあるし、そうでないところもあるし……」

この日、山崎安治氏と私は、沢渡から霞沢をさかのぼり最奥の二俣を左手の本谷にはいつて、台地状の一角を露営地にきめたのであった。この山行の

ために、小島鳥水が『文庫』に発表した「鏡ヶ岳探険記」のうち「第六章 白骨温泉の記」(一三八号、明36・8)「第七章 霞沢の急淵を渉る記」(第八章 梓河畔に立ちて穂高山を視る記)(一四二号、明36・11)の写しをつくて、みちみち鳥水一行の足跡を確かめながら登ってきたのである。われわれが、かりに左俣とよんだこの本谷の前方には、霞沢岳の大きな山容に稜線が扇型にひろがっている。いかにも谷の最奥というにふさわしい景観がくりひろげられていた。荒々しい堆石と幾重にもえぐられた川床は、この谷のすさまじさを物語っている。この本谷にくらべて枝沢としかみえぬ右俣を

つめれば、はやく稜線に達することができるだろう。われわれの推論ではじめのこの右俣が鳥水一行のたどった道として考えられていた。鳥水自身の記述ではどちらを通ったのか判然としないが、白骨から宮川の嘉門治小屋へ一

日で行くためには、右俣をつめて白骨を下るのが最良の選択であったはずである。しかし霞沢岳の頂上へダイレクをみて、あるいはというあらたな推論が生まれてきた。《漸く霞沢の絶頂に這いつきたるは午後一時》という鳥水の表現にまだとどめられたためだ。前方にみえる山の頂きがほんとうの霞沢の絶頂であるのかどうか、その背後にほんとうの絶頂があるのではないかなどと話しあいながら、左俣の本谷にはいりこんでしまった。それは絶頂を確かめたいという登高欲からであった。

霞沢岳の東面をさぐるうとおもったのは、かなりまえのことであった。この数年、小島鳥水の伝を書きつづけてきた私は、明治三十年代から四十年代にかけての鳥水の足跡のなかで、この霞沢廻行の記録だけは正確につかむことができなかった。《絶頂》という言葉にあまりにもふりまわされてきたのである。そのため私は誤記をおかしたことがあった。その後、雑誌『山小屋』(昭和十五年一月号)の座談会における鳥水の発言「白骨を出発してどこをどう通ったのか今では分らないんだが……滝や藪の中を自苦茶茶に登

って行った。とても苦しかった……。霞沢と言っても岳の頂上へは出なかった。ズット徳本寄りの尾根へ最後に辿りついた訳ですが。そこから神河内の盆地を好い気分では味はったのだ」という一節が、もともと確実なものとして考えられるようになったのだが、ともかく自分の足でそれを確かめなければならぬ。日本の登山史を正確にそれらに記している山崎安治さんも、同意見であった。こんなことになったわけだが、登山に出かけることになったわけが、登りやすい残雪期よりはむしろ鳥水一行とおなじ条件のなかで、この古い登山路を考えてみようということになった。時期として八月中旬をえらんだのはそのためである。

明治三十五年八月十七日、小島鳥水、岡野金次郎の二人が宿願の槍ヶ岳に登頂したことは、近代登山の黎明をつげる輝かしい記録としてよく知られている。鳥水の「鏡ヶ岳探険記」は二百枚ちかい紀行文だが、たんなる踏査の記録とか報告書ではなく、未知の山へいかう登山者のところをあますところなく描いているし、さらに文学作品としての評価にたえるものとして書かれたところの存在理由があるだろう。彼は江戸後期の漢文脈のなかで育ち、美

文の流行のなかで文章を書きはじめた青年であっただけに、文体はその影響からのがれられなかった。しかし登山史の上からみて、登山経路として徳本峠から一般道ではなく、白骨温泉から沢渡へ下り、霞沢から稜線を経ているところは、はなはだ特異なものと言わざるを得ない。このあと霞沢への記録はみあたらないのである。

鳥水一行がなぜ霞沢廻行という迂回路をとったのか。このような疑問がしばしば話題となるが、当時の鳥水関係資料からみると、きわめて明瞭なことだ。鳥水で案内人を得られなかったことと、鳥水のなかに白骨への遊志があったからなのである。

出立の約二週間まえ、上田在任の親友・滝沢秋暁にあっては書簡(七月二十五日付)に《貴兄にして同行へお加はり被下候は、百万の援軍を得たるより力あり是非々々御都合下されたく祈上候》という同行勧誘の一節があるが、それは秋暁が鳥水一行から白骨までを熟知していたからであつた。槍ヶ岳登山の同行者には、はじめ岡野金次郎のほか山崎紫紅、磯澤水が予定されていたし、また鳥水は秋暁の参加をつよくのぞんでいた。《旅程は先づ松本へまゐり鶴々村より導者を雇ひて日本第二の高岳鏡ヶ岳を登り飛騨方面に下り高山市にて文庫誌友会に列席し(既に約定あり)……》と、秋暁につたえているが、そのあと白山に登り、越中から立山、針ノ木峠をこえて大町へ下るといふ、きわめて大がかりな構想をいっていた。七月三十日付の秋暁の返信では《八月十日頃には、夏蚕も大低片付寄故、小生も成るべく都合して、せめて鏡ヶ岳までもお伴をたししと念じ申居候。飛騨から越中まではどうなるか諸合はず候》とあって同行がほぼ約束されていた。しかし鳥水が金次郎とともに滝沢家に一泊したときは、一家

は蚕の世話におわれて、猫の手もかりたいほどであった。

上田を出た一行は予定どおり松本から島々村にいたり、清水屋で槍ヶ岳登山の案内人を依頼するが、得られなかった。この年、槍ヶ岳では農商務省の測量事業が開始されていて、島々の猟師も人夫もみな三角測量機設置のために動員されていた。今や則ち斯の如し。休んぬる哉」と島水は失望を味わいつつ、教えられたまま松峠をこえて白骨にはいる。幸いにもこの土地は、山水紀行作家としての島水にとってぜひ訪ねたいとのでんでいたところであった。三十三年の乗鞍岳登山のときも平湯から白骨の道をききだして遊志をほめかしていたし、彼が発掘して『文庫』で紹介した新人・吉江孤雁の「秋の松峠越え」（明34・2）に興味をわけてきた。ましてや彼が兄事してきた秋峠からは、このひなびた温泉地のありさまを刻明にきいていて、みやげにもった白骨産の木の葉石を座右においていたほどであった。島水はここに二泊することになるが、白骨滞在は山川漂泊のおもいをみたすものであったといえる。それだけに「鎗ヶ岳探険記」中の「白骨温泉の記」は、かなり長文のものとなっている。これはあきらかに秋峠への報告という意味あいがあったからであろう。文中に「書翰一通を認め、切手を買はむとして新宅をおどろかす」という一節があるが、その一通とは秋峠あてのもので、さきに『近代登山の先駆者たち』に紹介したとおりである。

一行はここで大石屋の主人と猟師筒木市三郎を案内人に得た。島水の記述によると、前者は三十五、六歳、後者は二十三、四歳にみうけられたという。槍ヶ岳の早期登山者のなかで、霞沢ぐえという特異な登山体験をもつことになったのは、このような事情からであ

る。それにしても当時の量

式式製図では、地理的把握はいかんともしがたかったであらう。白骨温泉は梓川べりに記載されているのである。

常念山の最南端に位置する霞沢岳は、ほとんど登山者のはいらない静かな山である。上高地側からは八右衛門沢をたどる登山路があるが、稜線にむかってつきあがっている谷は浮石が多く陰惨な谷という印象はまぬかれない。いくつかのヴァリエーション・ルートも開拓されたが、上高地や槍ヶ穂高のにぎわいにくらべたらその近くにあるがらうな静寂がたどたどっている。それだけにこの山の存在はありがたいといわなければならぬ。むしろ熊やカモシカの気ままな棲息地として知られている。



となす」と書いたほどに緊張の連続であった。ますます深まってゆく谷にむかって右に左に徒渉をくりかえし、あるいは岩を攀じてすすむ。残雪期に入山したパーティの赤い布きれを下流に二つみただけで、たかば人間の匂いにはなにもなかった。ただ伐採人夫のためにつくられたという「針金わたし」だけがさすがに痕跡をとどめるのみであった。島水という「ネヅミ落し」は、中流より上、すなわち現行五万分局の岩場記号のあたりから予想していたが、それは意外にもはやくあらわれてきた。二つの屏風状の大岩塊のあいだから、水の流れは滝のように落ちこんでいる。壁をへずるにしても手がかりがないので、体ごと水流にぶつかるほかになかった。二人はここでロープを結んだ。左岸から足をいれると首まで水中につかって、急流に押し流される羽目になった。やむを得ず右岸へむけて斜めに横断して渡りきったが、胸で流れをおしきらなければならなかった。

谷の夜明けはおそい。頂上稜線が赤赤と輝きはじめたのに、露营地はまだ夜の眠りのままだ。午前七時、ようやく陽がさしはじめる。荒涼たる川原をのぼりつめると、残雪が右手をささぎづける。扇型にひろがった霞沢岳のかなめいた雪がここに集積されたようにみうけられた。それをのりこすと、水の流れは消えて急峻なガレの連続となった。ぐんぐんと高度をますが、足をふみだすたびに岩石はくづれてゆき、こころもなまいき登高がつづめなければならない。渾水帯にはいつて右手の鞍部をめざすことも考えられるが、きつい敷きぎを強いられるだろう。ここで岩石の崩壊に出あったら、体ごと残雪の地点まで押し流されるこ

る。それにしても当時の量式式製図では、地理的把握はいかんともしがたかったであらう。白骨温泉は梓川べりに記載されているのである。常念山の最南端に位置する霞沢岳は、ほとんど登山者のはいらない静かな山である。上高地側からは八右衛門沢をたどる登山路があるが、稜線にむかってつきあがっている谷は浮石が多く陰惨な谷という印象はまぬかれない。いくつかのヴァリエーション・ルートも開拓されたが、上高地や槍ヶ穂高のにぎわいにくらべたらその近くにあるがらうな静寂がたどたどっている。それだけにこの山の存在はありがたいといわなければならぬ。むしろ熊やカモシカの気ままな棲息地として知られている。

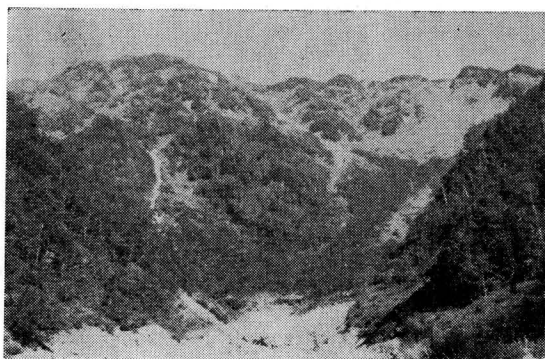
にはひろびろとした河原があった。堰堤はこの付近の谷の様相をかえてしまったのであろうか。島水ははじめて体験した徒渉をつぎのようにつづける。急流速くして危石も転ばすばかりなれば、両脚抗す可らず、重量を着けむがために石を抱へたれど、却つてそのためによろめいて、水中に頭踏せんとし、辛くも導者に扶けられて吻と息を吐きたりしが、かくして水を横断すること数分、時には深くして膝より臍に及べるを以て、紫蟹の如く蛙に這ひ上り、僵れたミヤマハシノキを踏みだして、枝ボツキと折れて余は崖より三尺許に落ち、鉛筆は飛んで旋へらずポケットに土沙入ること約五合、好個のハンデキャップなるかなと苦笑したることありき。

《崖の半腹を縦続すること三十町余、危峰交も天を衝いて回転し、急湍怒吼して人語を乱るところ、偶々大扉風の急斜面より珠を噴くごとく、蒲の穂の狂ふごとく、瀑水の高さ十丈許なるもの、鮮緑を洗ひて直下するに許さぬぬ、その二段に折れたる間に突き出でたる巖を、しぶきに濡れながら危ふく踏みて、向ひの巖へと跳りたりしが、瀑布を横断したる旅行も之をもてはじ

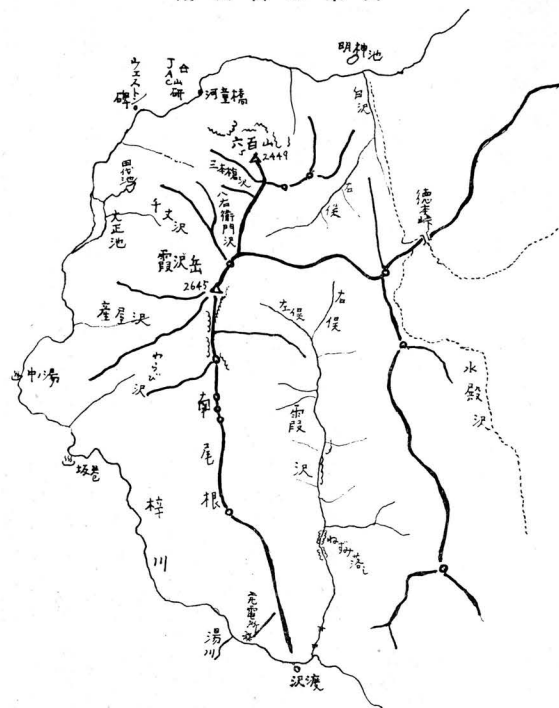
めとす》
当時、このあたりには樹枝をくみあわせた屋敷のものがつくられていて、冬期に入つて材木をうけとめるころだったのが、樵夫によつて尾根筋へむかつて道がつけられていたのかもしれない。島水一行は、この文章をよむかぎりでは、右岸を高橋きしてわれわれの眼前にかかる滝の途中から谷へおりたつたにちがいない。われわれとしては高橋きしようといふ考えられなかったし、むしろそれは不快なおもいをおこさせるものであった。

鳥水という霞沢の急湍は文字どおりの急湍であった。七時十分、梓川と霞沢の出合を採石場からみとどけたわれわれは、かすかな踏みあとについて登りはじめた。左岸ぞいに五分ほどいくと昭和三十七年十二月完成と記された小さな砂防ダムがあつて、それとこえと踏みあはるとなつた。昔は伐採、岩魚釣り、鳥捕りなどで人がはなされていまは地元民の生業からもみ谷あいに徒渉をくりかえしなからすむと、大堰堤にぶつかる。右岸の急な草つきをがむしやりに登りきると眼下

巨石を抱えて渉るべし、とは『日本風景論』の教えるところだ。それを金科玉条としていた島水は教科書どおりに実行してみたのであろう。ともかく樵夫個人の道をたどつてこの谷をのぼつたわけだが《急流の険絶悪絶を極めたるは、実にここなる霞沢を以て無上



霞沢岳の東面



ビバーク地点での夜明けはすばりかった。水殿の尾根からおもむろに輝きはじめた太陽は、するどい光茫をはなして南霞沢のピークを照らしはじめた。六時三十五分、朝露にぬれてふたたび急斜面の藪こぎをはじめ。五十メー

た。小さなブヨの大群に悩まされながら、露苔の用意をはじめ。滑落をふせぐために、身体と荷物にロープをつないで灌木に結んだ。明日の行動を考えると水は節約しなければならぬ。そのためそれぞれ一杯の茶でがまんせざるを得なかった。二人でツェルトをかぶったものの、身体はたえずずりおちてゆく。長い夜であった。

トルほど登ると右手に草つきがみえた。森林限界に達していることはあきらかであった。茂みをおしわけるようにしてまわりこんで、草の根をつかみ、がむしやりに最後の斜面を登る。その登りきったところが霞沢頂後の一角であった。そこにとびだしたとたん

小島鳥水一行の足跡を確かめようとして、はからず霞沢本谷を絶頂まで登りつめてしまったわけだが、われわれの霞沢の東面探索は、この次に右俣をつめることにより完成するだろう。この日、徳本峠へむかう尾根筋をたどり、白沢下降を予定していたが、水の不足はいかんともしがたく八右衛門沢を下山路にえらんた。のどの渴きをこらえながらも、なにが満ちたりたおもいで急斜面を下りはじめた。

【注】鳥水の「鎧ヶ岳探検記」は『文庫』初出のものとして『山水無尽蔵』所収のものとのあいだにかなりの異同がみられるが、ここでは初出したがった。

ちがない。……これはカミグチ（上高地）への近道として人間の選ぶ道ではないと断言できた。鳥水一行の足跡としてあるいはという想像はこどもろくも崩れ去った。やはりはじめの推論どおり右俣が彼らの通過した道であった。われわれは実感としてそれを確認することができた。耳をすますと足許から水の音が聞こえてくる。おやへんだな、聞こえるはずのないところなのに……とあらためてその音に注意すると、あきらかに、沢のひびきであった。こうこうと足許で音をたてている。伏流であった。山崎さんが足場のたしかな地点をえらんで、岩石をよけ、三十センチほど掘ると、かすかな水の滴りを発見することができた。われわれの足許の堆石の下には、空洞となって水が流れているのかもしれない。神経をとがらせて登るこのルンゼ状の急斜面で水が得られるとは、考えてもみなかったことだ。鳥水も右俣においてこ

れに注目し、つぎのように書いていた。『大石小石起伏重畳した上を踏んで、石壁を登りゆく、伏流の琳琅たるを聴く外には、峰より峰をわたる老鷹の声のみす』とあるが、おなじ様相を呈していたのであろう。このルンゼには風が通らず、真夏の太陽に灼きつけられて、汗はだらだらと流れおちる。しかし沢音をききながら清涼の気分を味わった、めずらしいひとときであった。

さらに傾斜をましてゆく、ガレを一つめ、岩棚をいくつかりのこし、ルンゼの行きつづまりを左手にまわりこんでスラブ状のもうい岩壁を登る。風化した不安定な岩にとりついて確実なホールドをさがさねばならない。とんでもないところだともいえないが、こまできたたたきだましくらに頂上を求めるところまで登りつめて、左手の草つきにとりつく。三十度以上もあるうかと

といわれるが、大粒のそれをみて慄然としないうけにはいかなかった。まあ出会ったら出会ったで、どうにでもなれ。そんな気持だった。せめてもの救いは、山崎さんが沢渡で買った鈴をリニックザックにぶらさけていることであつた。

午後四時、この瘦尾根の一角に二人が並んで腰を下せる斜面をみつめた。まだ陽は高いがここに夜営することにする。というのは、頂上までのくらの時間がかかるかわからなかったし、これ以上の場所のはじめそうにないと判断したからであった。

シベリヤで

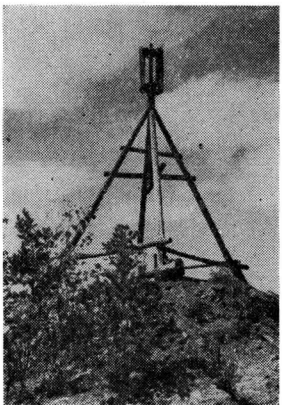
見つけた三角点

古沢 肇

いまだ三角点の話なんか面白くない、といわれそうです。それに高い山の頂上で見たものではなく、原野の中の小さな突起の上にあったものだから、なおさら山岳会の『山』には不向きだと思のですが、異国の、一連連邦の三角点ということで、なにかの参考にもなるかと、報告をさせてもらいます。

一九七三年(昨年)八月二十日、東シベリヤ旅行の途中、この日が一日、自由行動日ということになったのですが、みんなでピクニックに行こうということになって、インツェリストの人に案内されて、車ではこぼれてきたのが、「イルクーツクから六十四kmのコッテージ」という、ただそれだけが地名のこの場所でした。

部落でもないタイガ(森林)の真只中で、そこに唐松や枝の垂れた白樺の森から抜け出したように小さな岩山がそびえていて、その上に思いがけなく三角点の石と櫓(やぐら)が立っ



ているのを発見したのです。(写真) およその位置を申しますと、バイカル湖の南西端で、北緯五十三度くらいです。バイカル湖に近いといっても二十kmくらいは離れていますから湖水は見えません。

イルクーツクで売っている観光地図によれば、近くをシベリヤ鉄道が走っていて、ポトカメンナヤ(Podkamennaya)という駅がそばにあるようですが、そこも五kmくらいは離れているらしく、三角点からながめたかぎりでは、鉄道らしいものは、見当りませんでした。

三角点のあるところは、前述のように森林から三十mあまり飛び出した岩山の上ですが、そこにはシベリヤ赤松の生えたせまい頂上に、三角櫓と並んで、東洋風な感じの四阿(あずまや)がありまして。おそらくここまで登ってきてタイガの展望を楽しむ人がいるのでしよう。

三六〇度、一面の樹海で、まったく気が遠くなるようなながめでした。あの方向がバイカル湖です、と指さされた方角に、遠く山影と白雲とが見えていました。

すぐ足の下の森の中には、働く人の憩いの場として国が建てた小さなコッテージ、ロシアの芝居の舞台のような、一があって、そこをわれわれに黒パンのおいしい昼食をたべたり、抜け

るような青空、——まるで日本の秋を思わせるような、——を見上げて寝ころんだりしながら、夕方までのんびりとすごし、またイルクーツクへ帰ったのです。

三角点の標高は八〇〇mくらいと思われます。(注、イルクーツク市が四一〇m、バイカル湖の湖面が四五五mです)。やぐらの木は風雪に朽ちだいが傷んでいました。三角点の石材は、日本のように美しい小豆島産のみかげ石でできているのところが、ゴツゴツとしたコンクリートの柱のような感じのものでした。

てっぺんに、さびた鉄板がはめてあり、中心には十字形はなく、丸い突起(イボ)があり、それをとりまくようにしてわかりにくいロシア文字が円形に並んでいました。「1936」、それがだけがやっと読めました。たぶんこれが測量された年なのでしょう。

このレポートを書くのに、国土地理院の佐藤氏、日本交通公社の小川氏の教えを受けました。記して感謝します。(四九・七・二九)

素晴らしい 年長者との出会い

周布光兼

例えばダニエル・デフォーのロビンソン・クルーソーが契機となって、その人生を冒険と探検に投じた人のように、人はある時その先輩なり年長者から、その人生を支配するような教えを悟ることが往々あるものと思う。

さてこの「素晴らしい年長者との出会い」は、それとはいささか異なると思うのだが、実は、この夏丹沢の大山をヤビツ峠から北東の広沢寺へと越え

た時のことだった。暑い真夏の昼だった。私はガッシリした一人の男と道連れになり、できるだけよい休まないうちにピッチを意識して登ったが、やがて子供を交えた大バーティに迫っているんだとかその前にわたされたが、するとその直後に、その人たちがドツと湧いて「しっかりー」、「頑張ってー」。なにぞとぞとふり返ると、きたきた。年の頃は六十五才から七十才前後の一人がせせと登ってくる。山姿の人もおぼろげに運動靴の人もおぼろげにしかしなななななななななななな足並みを乱さず、誰も彼もが心なしか、なにかしら、誰か一人の老人。気が、颯々と腰を立てた一人の老人。気品ある白髪顔の威厳さもある。私は通りがかりにまた年令を伺った。七十五才くらいかと思いきや八十三才であった。驚いた、私より二十五才も年長である。大山といっても、あの石段ばかりの高距五〇〇mほどのケープルカー上の登りはバカにできないものだ、その老人の涼しい眼元には、さほどの疲れも宿っていないようだったし、むしろ一人で今日ここに辿りついたことが、なにかその人の生涯の意義ある一駒のようにさえ思わせるものがあった。

さて場面はそれから丁度一ヵ月後の木曾御岳山上。夏も残り少なく、折から山は台風のおおけを食って霧雨が横なぐりに吹きつけていた。起伏するいくつかの峰の展開する広い御岳山の山頂には、その雨風もなんのそのと信仰者の群が多かった。辿る先々に霧の中から白衣の集団が現れては消えた。多くは、五十才以下の人たちと見受けたが、やはりかねて聞いていたように相当な老人も加わっていたのだらう。五の池小屋で一緒になった私と同輩ほどの人は、途中で七十八才の人と話をしたと語ったし、別に、確かに八十才を越えていようと思われた老信者を中心の一人も私は見かけました。山の案内書にも「九十才の行者」という見出しで写真が載っていたし、このような信仰の山ではとくに年長者が多いことは当然かも知れなかった。——

しかし、——いま、山と年長者について云々するのは決して自己弁護ではなく、むしろ昔の、誰だったかが「四十、五十は鼻垂れ小僧」とよくぞい得たものよとの自省からなので、私としてはいま、より若い人のことをどうのという気持ちはさらさらしない。むしろその人たちは必ずその人たちの長所があり、それを伸ばすことこそ本当と思うのだが、しかもなおかつ、これらの年長者たちが、それぞれに今も山へ行き、山を通じて鍛え、考え、楽しんでる姿、これは素晴らしいこと、ほんとに素晴らしいことだと思うからに他ならない。

必ずしも、長生きして、それだけ無理していつまでも山に行くことだけがよいとは思わない。なにかの理由で行きたくても思わない人もいよう。それは温かく見守るべきであらう。ただ要は、いつまでも山——自然を恋い求めるその心、そして自己を克服するその姿が、われわれに感銘を与え、新たな生きる道への啓発を与えてくれるも



カ提
使の
野幸
氏
の
小
説
に
よ
る
今
日
の
供

のではあるまいかと思つたからなのである。

比較的最近会合でお会いした際。富永惣一氏のいわれたことも印象に残る（翁（オキナ）とは昔は六十才位からだった、今は八十才位からなんだな）。

日本山岳会にはバイオニアたりし長老が多い。大先輩方に対し改めて多大の敬意を抱いてこの感想を閉じる。

芽登温泉

川崎精雄

北海道の五万分地図に「芽登温泉」というのがあ。位置は「糠平」の東隣である。『山』四十九年二月号に書いた「神威岳」単独行の翌二日間を、札幌の会員小林年君と石崎貞子さんに引張られて、ウベサンケへ西側の谷から登った九月の山はもう紅葉に染まっていた。

下山するすぐ天幕をたたみ。溪流で汗の顔を洗うのもそこそこに、小林君の車で平野に引返した。夕方に近い平野の風景は、清澄の気がみなぎり、いま下りてきたウベサンケの姿が、牧場の柵の彼方に眺められた。農家の軒には、唐黍がたねて吊るされ、落葉松の粗林も沈んだ色を見せた。

然別川に沿って下った車は、東に角度を変え、土幌線を横ぎって、芽登の道に入り、再び北へ向って逆行の形をとった。同じような広い道の両側の秋草が、車の風にあおられて、夕暮れの風情を一層濃くした。

秋の気配の満ちた高原を、車は快適に走り、目に見えぬ程度の高度を増して行く。ゆるやかな丘陵状の山地がひ

ろがっている。美里別（みりべつ）川という優しい名の川に沿って、まばらな人家をつなぐ道が、西登温泉という所で、芽登温泉に分かれる。そこから二・三Kmの道のりだった。

温泉は川の対岸にあつて、吊橋があつた。秋のせいかわの川の水は少く、車は川を渡って玄関へ。応対にでた宿の主婦は、手が足りなくて泊められないという。自炊するからという、それなら大歓迎だという。普通とはあべこべだが、こちらもその方が有難い。

広い浴槽（セメント造り）に湯は惜し気なく溢れて流れ、裸電灯が淋しく灯っている。九月の連休というのに、泊り客が一人もいない静けさ。小林石崎両君も、ここは初めてのことだが、五万分の地図の名をもつて、なおこのありさまとは、北海道の良さである。

両君に炊事をお願いし、私は今後の行程を浴槽の中で考えた。明日は札幌へ帰る両君と別れ、愛山溪に入る。途中層雲峡を通るが、観光旅館に泊りたくないし、ロープウェイに頼る気はない。やはり愛山溪から足で登ろう。それから十勝温泉で高沢光雄君を待ち、十勝や芦別岳に登る。そのあとまた一人になってニセコや羊蹄山に登り、本州に戻って東北の山を歩き、最後は二岐温泉の会合にでる。

夕食を済ませ、三人で話している泊り客のいないはずの台所の方が賑やかだ。覗いてみると宿の主人と親せきの者という二人の男が酒盛りをやっていた。鍋に煮えているのは松茸の切り身だった。傍にある松茸はどれも牛乳びん以上の太さがあるのに、私はもちろん両君もびびりした。

その大根の輪切りのような奴をご馳走になる。彼等は得意げにクマネシリ岳で採ったので、明日案内しようかという。そんな大切な宝庫を教えるわけ

がないので適当に聞き流した。クマネシリ岳は、私たち最初の目的だったが、意外に奥まで開けているので、登ることはやめにした。朝は雨になった。前の川辺の杓が彩りを見せる。こんな静かな北海道の山の湯にいる良さをしみじみと思った。

大無間山、小無間山

松家 晋

今年の五月はじめ、南アルプス南部の大無間山、小無間山へ行ってきた。この山塊は、かつて、国体の登山コースにもなったところであるが、現在でも、入山する人は比較的少ないようである。

出発前に、地元の役場、営林署に、この方面の状況について照会したが、どちらからも、最近、未確認のため状況不明との返事であった。

テント持参の単独行は、荷が大きいのが、久しぶりの登山に、荷が大きいこと、五月の連休とはいえ、この山塊ならば減多人に会うこともなく、静かな山行ができるに違いないという期待で、東京を夜行で出発した。

金谷で大井川鉄道の始発電車に、千頭でバスに乗り継いで、寸又峽温泉に着いたのは八時過ぎだった。寸又峽温泉からは旧軌道のあとを、千頭ダムまで寸又溪谷沿いに歩く。この深い溪谷の新緑は、実に美事なものだ。

問題は千頭ダムからの登りである。以前は、ダムを渡って、尾根に沿って登山道があったようであるが、現在、この千頭ダムの上に二つの林道ができ、一つはこれからわかれ、逆河内方面へ

向う林道である。このため、この付近の登山道は荒されてしまっている。

寸又林道の開通した現在、大無間山方面への入口は、この林道にある大垂沢橋とみてよいだろう。ここまでは、千頭から車で直行もできるし、また、千頭ダム方面から歩いたとしても、結局、ここから入山することになるからである。

大垂沢橋を渡って、林道とわかれ、すぐ、木の梯子段から登りにかかる。第一目の大垂沢小屋は、林業小屋として使用したのであるが、現在、トタン屋根の一部を残すだけで、ほとんど骨組だけに荒廃している。

テントを張る必要もないので、この小屋の片隅でシェラフに入り、早め寝る。夜半に目ざめると、破れ窓より月の光が明るく射し込んでおり、野ねずみだろうか、小屋の片隅でゴソゴソと音をたてていた。

翌日は快晴である。鶯が小屋の近くでしきりに鳴く。対岸の黒法師岳、不動岳の頂きに朝日があたりはじめた。小屋の周辺はきれいに伐採され、明この尾根の斜面が尾根まで続いている。この尾根の上にて、はじめて、原生林の道に入っていく。

残雪やくま笹のため、踏跡の不明瞭な箇所がいたるところにあったが、尾根に沿ってトラバース気味に行く。笹の多い三方窪から原生林の急登にかかるあたり、倒木があちこちで道を塞いでいる。コケを下地に白いゴゼンタチバナの花が可憐である。

尾根のコブを三つ四つ越えたところで、踏跡が全く消えてしまった。尾根沿いにガレのしを、深い笹をかき分けながらモウレツに登りつめると、大ガレの頭にてた。地図上、二、一六mの地点である。大根沢山越しに残雪に輝く聖、光岳方面の展望がよい。やがて、尾根のうえにある小さな三

隅池に着く。池のほとりはまだかなりの雪を残していた。原生林に囲まれた幽邃な池で、すぐかたわらに、倒れかかった丸太小屋がある。南アルプスを広く世に紹介した平賀文男氏は、この池を「アルプスに於ける最もなつかしみの多い童話的神秘な池」と称えている。（日本南アルプス「博文館」大無間山頂への登りは残雪が一段と多くなり、見通しのきかない原生林の中を、方向を見失なわねうに登る。雪はかなりしまっているが、ときどき、股まで踏みこむのは閉口する。

山頂近くになって、原生林のびっしり生えている中を、キスリングを背負って、これを縫いながら登ることは困難になり、身動きならなくなった。このため、鉈で切り開きながら進むことわずかで、開けた大無間山頂に飛びだした。

日はもう西に傾き、三角点の上にあるなかば倒れかかったヤグラが、長い影を落していた。

早速、雪のない窪地にテントを張る。山頂はモミ、シラビンなどの原生林に囲まれており、梢を吹きぬける風が、夜通し鳴っていたがテント内は静かであった。

翌朝、山頂は快晴の朝を迎えた。しかしモヤのため、期待した御来光は見られなかった。五月とはいえ、二千mを超えている山頂の夜は、冷えこみもきびしく、前日、雪で濡れた靴がテント内で凍っていた。

テントを撤収して小無間山に向う山頂にはとくに指導標もなく、縦走路入口付近の木に打ち付けた、文字の消えなかった古い板が残り残っているだけだ。山頂からの下りは雪が多く、尾根沿いにナタ目を目しるしに下る。

途中、逆に縦走してきた、二人組のパーティに会う。この山域に入ってはじめて会う人だ。

大ガレの頭にてたのでふり返ると、めずらしく大無間山への全貌が現れ、手にとるように近く望まれる。このコースでは、常に原生林や灌木の中を行くため、ガレのヘリにでもでなければ展望はない。

尾根に残雪も少なくなつて、正午前に小無間山頂に着いた。山頂は平坦で明るく、シラビンやソウシカンバの混交林で、展望はない。立木に山名の標識を打ちつけてあるので、山頂とわかるが、これがなければ通り過ぎてしまひそうなところである。縦走路にカドのかけた三角点があった。

小無間山からは一旦急激に下り、大小四つばかりのピークの登下降をくり返さなければならぬ。鋸歯といわれているところだが、尾根まで灌木が密生しており、踏跡もすっかり失っていることから、とくに危険なところはない。やがて、原生林のなかに立派な無人小屋のあるピークに着く。この小屋はすぐ近くにある鉄塔（無線電話の反射板が取り付けられている）の管理用として建てられたものだろう。

このピークを最後に田代部落への下山にかかる。急坂を下るにつれて、やっと木々が芽ぶきはじめていた。前方に深い大井川の溪が見え隠れし、西日を浴びながら下っていく。山吹や八重桜の咲く田代部落に着いたのは六時だった。

田代で泊るつもりでいたところ、現在田代には宿屋はないという。かつて、中村清太郎などが大井川奥山に入つた頃この田代はそのベースになり、何軒

かの宿屋もあったようであるが、それらはなくなったであろうか。やがて井川行終バスがきたので、井川にて泊る。

大無間山、小無間山の縦走は、このうへなく、地味な山旅といつてよいかなと思う。コース中にロクな小屋もなければ、水場もない。また、道も乱れて

英国女流登山家の先駆者

J・ダンシース女史を囲んで

婦人懇談会

九月二日（月）午後六時半より八時まで山岳会ルームにおいて、英国レディ・ス・アルバイン・クラブのメンバー、ジョイス・ダンシース女史をお迎えし、スライドとお話を聞く会を行いました。

参加者は、三田前会長、吉沢前副会長はじめ男性会員数名、女性会員四十名、会員外三名というにぎやかな顔ぶれでした。

このたびの来日は、英国大学婦人協会会長でもある女史が、京都で行なわれた国際会議出席のためでしたが、ぜひ日本の山々も歩きたいというご希望でしたので、田村協子会長が中心となり、森宏子会員、鴨原洋子福岡山岳会会員など多数の友人の協力を得て、立山、上高地、富士山などご案内しました。あいにくの悪天候のため、登山は、思うようにいかなかったようですが、二週間のハードスケジュールを無駄なく費され、お疲れの様子もなく、さすが大先輩（当年七十歳とか）と驚嘆させられたということです。

ダンシース女史は、日本でも、女だけのヒマラヤ、広瀬玲子訳「人文書院刊 昭和三十四年の著書で知られていますが、ニュージブランドアルプス、

おれば、展望もないということで、華やかなものは何一つない。

このような条件が、この山域をいつまでも、静かに保っているのかも知れない。入山中は連休の真最中であつたが、途中で出会ったのは、結局、一組だけで、実に静かな山旅だった。（一九七四年七月記）

カナダロッキーズ、第一次英国女子ヒマラヤ遠征隊（一九五六年）、コーカサス、アフガニスタン、ルーマニア、第一次インド女子ヒマラヤ遠征隊（一九六四年）のリーダー、ペルーアンデス、エベレスト周辺、一昨年にはキリマンジャロと、世界各国の山々を精力的に歩かれています。

経歴をごらんになればわかるように、その国際的な活躍と、知性あふれる中広いお人柄に接して、すっかり魅了されてしまいました。

ちなみに第一次ヒマラヤ遠征が五十年代、大いに刺激され、がんばらなくちゃ、と意を強くしました。

散会後、有志十数名で、六本木蘆山において食事しながら時を忘れて閑談。宿舎Y.M.C.A.の門限十時半に、すべり込みセルフという離れわざを演じるなど、かずかずの思い出を残し、九月三日離日されました。

なお、立山では、文部省登山研修所にも一泊、お世話になりましたことお礼申し上げます。

模範警員より

目下ギックリ腰にて引籠っており、残念乍ら失礼いたします。どうか同氏によりしくお伝え下さい。

牧野会員ご夫妻より
イタリア旅行中で九月末帰国の予定です。ので出席できないとの連絡。

穴田雪江会員より
私にとって本当になつかしく、共通のデオチバの想い出があるダンシース女史に一目でもおめにかかりたいのですが……出席できず残念です。とそれぞれ通信をいただきました。（小倉重子）

穂高岳涸沢合宿報告

青年懇談会

青年懇談会（大倉昌身担当理事）では、今年で三回目を迎える恒例の穂高岳涸沢合宿を開催した。八月十一日に上高地山岳研究所より涸沢へ荷上げを行ない二十人用の大天幕を設置した。JAC旗を立てると涸沢キャンプ場の中でもひととき目立ち、他の多くの天幕を圧倒するほどであった。さいわいにも、十七日までの合宿期間は天候にもめぐまれて、延べ三十人余りの利用者があつた。しかしながら事前のP・R不足ということもあって利用率はいま一歩所期の目的に達せず残念であつた。

『山』や各支部長宛に事前通知は行なつてあつたが、青年懇談会の涸沢合宿が会員の間に定着するように、来年度から会員多数の参加を希望する次第です。

十七日に天幕を撤収して、夜上高地の山岳研究所にて打ち上げコンパを行ない、今年度の涸沢合宿を無事終了した。

た。今合宿には、戦後二十数年ぶりに涸沢をおとすれ、JACの会旗をみて立ち寄られた越後支部の金山淳二氏が、小屋泊りを変更され天幕に泊られた。天幕にて金山氏が、青年懇談会のメンバーと一緒に酒を飲みながら昔の穂高の思い出話をされたことが非常に印象的であり若い会員達も有意義であつたと思う。（桐生）

海外からのたより

カトマンズより

高橋 照

もうこの国にきてから約一ヵ月になります。日本をたつ時やつと梅雨が上つた時でしたが、こは今雨季の真最中です。しかし、この一週間位前から半日は青空がでるようになりました。

なにも目的もなくカトマンズにきたのだし、また今は雨季の最中なのでトレッキングにでることもできません。毎日、日がでると芝生の上で日なたぼっこをしています。ここにくるとなにもするともなく、またなにをする意欲もおこらないので、いたってのんびりしています。夜は毎日フイルのステリーキ、しかも二五〇g位ずつフレアに焼いてウィスキーを平本宛あけて食べています。なにしろ印度より空輪でもってくる牛肉で、安いこと驚くばかりです。町の Fresh Store に行き二Kg宛買ってきます。一Kg一七ルピーなので日本円にすると四二五円です。しかもフイル肉でとてもよわらかです。この国はスパイスが豊富なので、自分ではいろいろのスパイスを使いわけています。

たまに町の本屋をあさり、もっぱら西藏に関する文献など買っており、また西藏語、サンスクリットなど

の辞典や文法書もかなり集りました。

今年は、日本からの遠征隊も三隊だけなので、静かなカトマンズの毎日です。ときどき新聞でみかけますが、ニクソンの辞任後の政界、財界それに韓国との問題など、いま日本はそう然としていいるのではないのでしょうか？

今日は土曜日（この国の休日）なので、また沢山のネパールの友人が遊びにくることでしょう。そんな時はいつも夜中の一時頃まで飲むハメになっても酒を飲んで、裸になった時の人達で近親感が表われてくるものなのです。私はそんな機会を沢山つくり、なるべく多くの友人をつくりそして、自分のためにもなるネパール語を少しずつ身につけております。

土曜日の皆様もお身体に気を付けて、楽しい毎日をお過ごし下さい。

（土曜会宛 八月二十四日）

同 二 信

もうここにて一月半になります。ラムジュン隊も三日前、青山学院のヒマルチュンも昨日出発しました。

夜になると、灯をたよりに飛んでくる羽虫が急にふえてきました。これはモンスーンが、もう終わったという証拠です。コロギや鈴虫もなきはじめました。急に秋が訪れてきたようです。

もうあと半月で、ネパール最大の祭、ダサインが始まります。そして、それは十五日間続き闇夜（暗の月の十五日）で終わります。そして、月の十日目には光のお祭ティハールの日になります。ティハールとはネパリー語で、ヒンディ（またはネパール語ではカリ・プンジャ）ともいいます。ラクシミー・プンジャといっています。ラクシミー（またはカリ）は富の女神でシバの第二夫人です。それぞれの民族はみな自分達のための祭りをします。印度人や

ネパール人は富の女神をたたえて、公然とバクチをします。そして家々の窓や門に灯をたくさんつけます。金持は屋敷のまわりを豆電球でかざります。

だから街中が光の海と化します。しかし、まずい農民達は野や畠でかがり火を焚きます。そうすると、虫が飛んできて火の中に飛び込み、みな死んでしまいます。だから、ティハールの日に過ぎると、今までたくさんいた虫も急になくなり、そしてやがて冬がおとずればはじめます。日本の虫追いに一寸にてもあり、こんな行事を行うことによって、ハッキリ季節感をくぎっているようです。

ネパールのムスタンは、いまカンパの反乱で情勢が悪いので、今回は一切口にもださず帰ります。

（土曜会宛 九月一七日着）

図 書 紹 介



横 乃 實

横智雄先生追想集

田崎英之篇

横智雄氏といえば、横有恒氏のお兄さまであることは承知していた。昭和四十三年物故されたが、その立派な追想集が神田のある古書店にでていることを知り、防衛大の朝日一男先生にお

願いして一本書に寄贈していただいた。

なぜこの本に眼が着いたかといへば巻頭の写真の中に、横有恒氏の子供時代と青年時代のまことに可愛らしい写真が掲載されており珍らしく思ったことと、第七章の「家庭における先生」の項に、横有恒氏の「わが家を語る」と題するこれまたきわめて貴重な一文が収められていたからである。さらに有恒氏は「一兄の想い出」を書いておられ少年時代の旅行、亡兄と登った山、自然への想と三章に分けて追想を述べられており、これも見逃せない記事である。とくに山の本というわけではないが以上のような意味で紹介しておきたい。

昭和四十七年十一月十日、横智雄先生追想編集委員会発行、七八四ページ、非売品

（山崎安治）

Samuel Brawand: GRINDELWALD BERGFÜHRER

75 Jahre Führerverein
Grindelwald Festschrift
zum Jubiläum 1973

瑞西グリンデルワルト登山案内者協会創立七十五周年を記念して出版された『グリンデルワルトの案内内達』なる小誌について。そもそもこの記念出版物は昨年、すなわち、一九七三年三月グリンデルワルトで出版されたものだが、私の手元に届いたのはこの八月で、五十年来のスキートの友達ははるばるツリーヒから送ってくれたのだ。現在は定年退職恩給生活者であるその古い友達も、私が一九五五年いく年ぶりかで訪れた当時、グリンデルワルトの山村に瑞西の社団法人中央観光協

会グリンデルワルト支部長としてアイガーの麓でシャレーに住んでいた。それはさておき、日本のアルプス登山者にとって縁の深いグリンデルワルトの案内内といえは、加賀正太郎、辻村伊助、近藤茂吉さん方の第一次世界大戦前は別格としてアイガー東山稜、つまりミッテレグラーデを横さんが初登攀した時雇ったフリッツ・アマッター（肉屋の親爺）フリッツ・シュネーリ（山案内専業）サミュエル・ブラヴァント（当時は小学校教員後年ベルン州建設大臣を経てリヨッチベルグ鉄道の常務取締役）に就任、現在はグリンデルワルトの自宅で悠々自適）といった顔ぶれである。東尾根初登攀の壮舉には盲腸手術の直後で参加できなかったが横さんのごひいきだった案内にエミル・シュネーリ（旅館兼居酒屋経営）がいたが、これらの連中も生残りはブラヴァントだけになってしまった。その愛称ザミーがこのグリンデルワルト案内小史の著者である。アルプスで組織案内組合の最古といえは、一八二一年シャモニーに誕生した職業的組合である。当時アルプスの峯々をわが物顔に歩き、かつ登った剛者の中には、ホインバー、アンデルソン、ステフェンといった英国の面々だが、彼等ともシャモニーの案内組合事務所内におちおち規則になっているので案内人側には組合に所属している以上出番がきまってる、希望の案内人を雇入れるわけにいかなかった。

さてグリンデルワルトでは今の案内人協会の前身ともいえるべきフェーラー・フレイヤーが一八五六年に創立されたといえるもの当時この会の主たる役割は、登山小屋への小径の整備にあった。ところで現在の協会は一九八八年二月六日に、土地の牧師ゴットフリート・ストラッサー氏の肝入で設立をみた。ストラッサー師の草案になる定款

が承認されそれまで案内内と客との間にあやふやだった賃金のいざこざを解消するのに役立ちグリンデルワルトの案内内たる者は誠実、慎重、勇気、実力、を旨とすることを鉄則と宣言して、時にこの小誌を読んで、日本山岳会員に直接関係のないことながら省略して、われわれが身近に感じることが多い。たとえば、横さんのミッテレグラーデ初登頂であり、アルプスの名だたる未登攀山稜の最後の尾根であった欧州の登山家の間で騒がれたものだ。それからあらずか、アイガー東山稜の初登攀を成就した横さんから当時の金一万瑞西フランがグリンデルワルト・フェーラー・フレイヤーに登山小屋設立の基金として贈られた。これを受けた案内者協会は会員の積立と有志の寄付によって一万六千四百六十フラン八十ブフェニヒが集まり、東山稜の登頂には打ってつけの場所に、案内人組合所属の小屋を一万七千三百六十七フラン余で完成した。

余談めくがこの小屋の決算では九十三フラン余剰金ででている。とにかく予算超過の赤字のと青息といきの当今の企画からすると、まことに羨しくも古きよき時代でしたという外ない。時移り者変り、アルプスでもわが横、松方二両氏が馴染の案内内をいく週間も常備してオーバーランドだワリスだ、シャモニーのドフィネの、と股にかけた時代は過ぎて、当今では案内内者の側からみてもお馴染さんといった客はほとんどなく、登山家と職業案内者間の友情といったものがつつかわれるすべもなく残念なことがとがとブラヴァンド君は述べている。

私事にわたるが筆者がこの五月末グリンデルワルトの山村を訪れ昔馴染のホテルバーンホーフに泊ったら、一夜あけの地区のロータリークラブの集会がその宿の酒場で行われ、その席に招かれた私

に、往年浦松君とフインステラールホルンやフィッシャーホルンにスキー登山した時のフューラーは、エミル・シュトイリーとハンス・ベルネットだったが、そのベルネットの息子が私が山村にきたことを知ってその夜の会合にとうに今は故人となった父親のフューラーブック(山案内手帳)を持参してきたのには感慨無量であった。

そこで本文の締めくくりとして、かつて華かだった男の中の男の仕事として、ベルグフューラー達の将来は、と問われれば、アクロバティックともみえ極限を追求してやまぬ岩場や氷壁の登攀は職業案内者の業域ではない。むしろより多くより広い範囲で人々に登山の愉しさ、自然の美しさを教え導くことを渡世とし、しかも常に己を鍛えて、高度の技術と体力を備え、不幸にしてアイガー北壁をはじめ、あらゆる悪場で遭難事故が発生した場合に身を挺して救助に当るのがフューラー魂であり、その本分である、とブラヴァンド君は強調している。

一九二六年夏、秩父宮様がエンゲルホルン群峯で岩登りを遊した時、横さんのお声がかかりで随伴した私は、ブラヴァンド君の綱で引張上げられたこともあり、また同君からは冬のグリンデルワルドで、スキージャンプをコーチしてもらったこともありグリンデルワルドの山案内達の小史を綴るにはまことにその人を得たと申すはかない。西にブラヴァンド、東に横この二所所の健在、長寿をお祈りしつつ拙文を擱く。(昭和四十九年晩夏)(麻生武治)

図書室便り

(昭和49・9)

新刊図書受入報告

西丸震哉氏寄贈
(1)『山歩き山暮し』 昭和49 中央公論社

- (2)『動物紳士録』 昭和48 中央公論社
- (3)『食物の生態誌』 昭和48 中央公論社
- (4)『山だ 原始人だ 幽霊だ』 昭和46 経済往来社
- (5)『続・山だ 原始人だ 幽霊だ』 昭和47 経済往来社
- (6)『西丸震哉・五島勉共著「実説 大予言」』 昭和46 祥伝社
- (7)山下滋子氏寄贈
- (8)山下久夫著『かんあおい』 昭和49 若溪堂
- (9)吉沢一郎氏寄贈
- (10)日本ヒンズークシ・カラコルム会議編『カラコルム—吉沢一郎古稀記念文集』 昭和49 若溪堂
- (11)共同通信社寄贈
- (12)松方三郎等著『松方三郎』 昭和49 朝日新聞社寄贈
- (13)『深田久弥山の文学全集』 昭和49 上の道
- (14)定期刊行物受入報告
- (15)『郵報・会報』
- (16)東京白樺会『白樺』No. 228(49-7)
- (17)日本ヒンズークシ会議『HIMALAYAS』No. 13, 14(49-4, 8)
- (18)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 88(49-9)
- (19)『ふじの山岳会月報』No. 157(49-9)
- (20)国立公園協会『国立公園』No. 297/298(49-8/9)
- (21)京都山岳会『京都山岳』No. 593(49-9)
- (22)『長野県山岳総合センター所報』No. 13(49-8)
- (23)東京医科大学山岳部『山懐』1973(49-9)
- (24)東京野歩路会『山嶺』No. 533(49-9)
- (25)日本自然保護協会『自然保護』No. 147(74-8)
- (26)低山を歩く会『低山』No. 111

- (27)『(74-9)』
- (28)日本山岳協会『登山月報』No. 63, 64(49-6, 7)
- (29)日本登山協会『山と雪』No. 196(49-9)
- (30)『雑誌』
- (31)『アル』No. 199(74-9)
- (32)『岳人』No. 328(74-10)
- (33)『岩と雪』No. 39(Autumn 74)
- (34)『山と溪谷』No. 433(74-10)
- (35)『海外雑誌』
- (36)『Die Alpen』N. 7, Juli 74.
- (37)『Alpinismus』74-8.
- (38)『The American Alpine Journal』V. 19, No. 1 1974
- (39)『Appalachia bulletin』Vol. 40, No. 7 & 8
- (40)『Ascent』Vol. 2, No. 2, July 74.
- (41)『Der Bergsteiger』74-7 & 8
- (42)『Climbing』July/Aug. 74.
- (43)『Deutscher alpenverein. Mitteilungen』26. Jahrg. Heft 4, Juli/August 74.
- (44)『The Geographical Journal』Vol. 140, Part 2, June 74.
- (45)『La Montagne et alpinisme』100 année, no. 97, 74-2.
- (46)『Österreichischen Alpenvereins. Mitteilungen』29. Jahrg. Heft 7/8, Juli/August 74.
- (47)『UIAA Bulletin』No. 58 & 59

和書目録完成のお知らせ

図書委員会

日本山岳会図書室の蔵書は年々お増えし、現在和書だけでも四千冊に達しております。約十年前に目録を発

行致しましたが、その後未収録の蔵書がふえしたので、新しい目録の作成作業に入っておりますところこのほど完成いたしました。

目録というものの性格からも、また膨大な資料を広く会員各位に活用していただくためにも、当初は、無料で配布する予定で、その予算を計上しておりました。ところが、昨今の諸物価の高騰は、印刷面においても例外ではなく、また十月からは郵便料も値上げされたため、予算をはるかにオーバーしてまいりました。まことに残念な状況ではございますが、このような事情のため、会員各位に一部実費負担していただきまして、希望者のみにお送りすることになりました。ご希望の方は実費および郵便料として、一部三五〇円(切手代用可)同封の上、事務局までお申し込み下さいますようお願いいたします。

なお、この目録は、明治以後本邦で発刊されました山岳書はほとんど収載されておりますので、貴重な資料となるものと存じます。

(伊藤博夫)

~~~~~

南米大陸女子縦断隊

十一月二十三日に出発

女性グループ四名で、南米大陸を国産車二台で縦断する計画に、会員小倉董子、森宏子、田村協子の三名が参加することになりました。他の一名は、早大自動車部OGの大賀愛子。小倉以外は、一九七〇年アジアハイウェイ二万Kmを走破、その経験を充分に活かした南米九ヶ国(ペネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビア、チリ、アルゼンチン、ウルグアイ、ブ

ラジル)約三万キロを縦断し、日本を南米のひとびとに紹介し、また南米各国のひとびとと交歓して、その実情を女性の目でテレビカメラにとらえ、テレビ放送により日本に紹介しようというものです。

途中、アコンガグア登山も計画しておりますが、限られた十日間では、少々無理のようですが、できるだけ努力はする覚悟であります。

十一月二十三日羽田発、翌年三月中旬帰国の予定です。(小倉董子)

~~~~~

会 告

秩父宮雅仁親王文集

「思い出の記」について

さきに宮家から、ご下賜をいただいた「思い出の記」一一〇冊は、希望者に頒布しました。収入三十三万円は、ご下賜金として一般会計に繰入れ、上高地山岳研究所の建設費にあててにいたしました。

昭和四十九年九月

理 事 会

~~~~~

あとがき 第三種も取れ、三〇一号から三五〇号までの目録もできました。前者は伊倉、後者は小倉厚西氏の絶大な努力のためものと感謝しています。十二月七日の年次晩餐会には是非御出席下さい。(山崎)

昭和四十九年十一月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六六一  
利根川商事(株)くらビル  
発行所 法人 日本山岳会  
編集代表 山崎 安治  
(813)二二八六代表  
振替口座東京四八一九番  
東京都赤坂一丁目三番六号  
印刷所 株式会社 技 報 堂

# 茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

## かんあおい

山下一夫著 <A 5判>定価2,600円

## 遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年

日本山岳会東海支部

<B 5判430頁・カラー64頁>定価4,800円

シブトンの自叙伝

## 未踏の山河

大賀二郎・倉知 敬訳

<A 5判440頁>定価1,900円

## 山に忘れたパイプ

藤島敏男著 <菊判584頁>定価2,500円

## 森林・草原・氷河

加藤泰安著<A 5判482頁>定価1,500円

## 山の古典と共に

大島堅造著<四六判280頁>定価1,500円

## 雪山・藪山

川崎精雄著

<A 5変型判340頁>定価1,200円

## 我がスキーシュプール

麻生武治著<B 6判388頁>定価3,400円

## 山 岳

日本山岳会編

<A 5判>

67年 2,500円  
66年 2,300円  
65年 2,000円  
64年 2,000円  
63年 2,200円  
62年 2,000円  
総索引 1,000円

## 山で唄う歌1集・2集

戸野 昭・朝倉 宏編

<A 6判126頁>1集240円・2集280円

## 屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編 <B 6判202頁>定価480円

## 日高山脈

北大山の会編

<菊判362頁>定価2,200円

## 原野から見た山

坂本直行画文集

<B 5箱入布特製本>定価4,200円

## 雪原の足あと

坂本直行著<B 5判206頁>定価2,800円

## 日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

<A 変型208頁>定価3,600円

## いろいろばた

南会津山の会

<B 24どり判320頁>定価1,900円

## すこし昔の話

初見一雄著<四六判400頁>定価1,200円

## ブータン感傷旅行

小方全弘著 <菊判280頁>定価980円

## 登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編 <A 5判350頁>定価900円

## 登山・スキー用具専門店

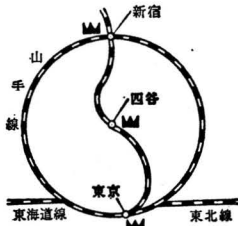
●買いやすい  
山の店

## 山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101  
TEL. 06(362)5736

●北へ来たら  
山の店

●フレッシュな  
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地

TEL (351) 7432・1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五

TEL (271) 1560・8575

新宿店 新宿ステーションビル四階

サービスショップ

TEL (352) 6564

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

## 山とスキーの専門店

## 片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべくなんにも  
持たない方がいい  
けれども、どうも  
要るものがある。  
なにしろ人間ですかり  
そして登山ですかり  
どうしても必要なもの  
をこしらえておる  
主役は、もっています

かたるびンテイ  
でんや 281-8456  
中央区八重洲4-1

秀山荘

## 登山とスキー具

## イワタ

東京都中央区日本橋通2-1  
PHON: 271-7686・1718

## 登山用具の専門店

## 好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031  
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店  
大阪店・北区堂島橋上二丁目47 (364) 0933 (代)  
福岡店・埴 崎 町 1 - 4 (28) 3440

